

一晚中留置されて、朝七時ごろになっていったん家に帰されましたが、また午前九時に再び来るようにと言われました。言われたとおり、九時にまた警察署に行きました。

警官は私によく考えてみたかと聞きながら、また質問が始まりました。私は原理のみ言を話してあげてそれ以上はないと言いつつ、その後黙ってしまいました。

しばらくして情報課長という人が現れて、「長老教と統一教との違いは何ですか」と聞いてきました。私は創造原理からメシヤ論まで簡単に要約して説明しました。私の話を聞いた情報課長は、もう家に帰ってもいいと言いました。

翌日の朝、地方へ出張中であつた夫が「当局から非常電話があつた」と言いながら帰ってきました。私はその間あつたことを残らず話しました。夫は「妻の信仰問題は妻のものであり、夫の私には別にかかわりがないだろう」と軽く言いながら、警察署に行きました。

ところが、翌日夫が勤め先の郡庁に行つてみると、辞任を勧告する書類が机の上に置いてあつたのです。訳の分からなかつた夫は郡守に聞いてみると、上からの指示があつたからだとのこと。その辞任勧告書には「家族の一人がある社会団体の幹部と接している」と書かれていたそうです。

私はあまりにも論理の立たない口実だと思ひ、郡守を訪ねて聞いてみましたが、思想の問題なので、郡守としてもどうしようもないということでした。

当時、国（革命政府）では、公務員に対して第一に思想、第二に勤務評定、第三に不正蓄財、第四に女性問題などを中心に人員整理している時でしたが、あつてなく第一項目で引つかかつてしまったわけです。

雷は我が家に落ちました。不名誉に職場を失つた夫は、夫なりに腹を立てたり、夫の親からはめんどりが泣いて家系が減んだと言われたりもしました。兄弟たちからは、異端に付いて行つたからそんな結果になつたんだと言われたり、高い地位についていた親戚などは、自分たちに汚点を残す恐れがあるということで、最初から近付こうともしませんでした。また隣人や友人は私のことをひそひそと話していました。

海の底は岩礁だらけでサメが群らがつており、荒波の中で戦いながら切り抜けていかねばならない立場に立たされた私は、ただただぼう然としているばかりでした。

（つづく）

新しい価値観の定立のために

三大主体思想（後編）

이 상 헌
李 相 憲
韓國統一思想研究院院長

(6) 一つの中心の三主体性、および三大主体思想

次は一つの中心の三主体性と三大主体思想について説明します。ここに三主体性とは、一つの中心が父母、師、主人の三主体の役割と愛を同時に行うことをいいます。一般的には三つの中心は各々別のものであります。しかるに父母が同時に師であり、主人であるということです。したがって、三主体の役割と愛は、各中心が単独的に行うのみでなく、一つの中心が三主体の役割と愛を同時に行うのです。父母は父母としての役割を主として果たしながら、師の役割、主人の役割も同時に果たすのです。師も主人も同じです。そのように三主体性を父母が実践し、師が実践し、主人が

実践するのです。学校の先生は先生の仕事を主としてやりながら、学生を父母の立場で養育することもできなければなりません。また、主人が部下を治めるようなこともしなければなりません。

主人は主管、管理、治めるなどが主な仕事ですが、父母としての役割、師としての役割も果たさなければなりません。例えば管理者は、管理の仕事以外に、子供を養育するような立場で、温情をもって従業員を食べさせ、着させ、住居を提供したりするのであります。そして主人でありながら、師の立場に立つて、部下や従業員に規範や知識を教えることもできなければなりません。

このように一つの主体、すなわち一つの中心が、三主体



第7回国際統一思想シンポジウムで基調講演する筆者(1990年7月・東京)

なくなりません。これまた上向性の愛です。のみならず学生たちも互いに愛し合います。師の真なる愛に感銘して、学生同士が愛し合うようになります。すなわち横的な愛を授けます。このように誘発効果を起こすのが師の下向性の愛です。

この前、ある大学で学生が先生を殴るという事件があり

性の役割と愛を同時に遂行するということも文先生の三大主体思想です。つまり父母の三主体性、師の三主体性、主人の三主体性の実践に関する思想が三大主体思想であるといえるのです。ところで父母、師、主人の愛は各々、子女、学生、部下に対する愛であるので、下向性の愛です。このように、一つの主体が三つの役割を通じて、下向的に愛を実践しなければならぬというのが三大主体思想です。これは非常に重要な意味があります。

ところですでに述べたように、自己中心的に利益を得ようとするのではなくて、他人に限りなく与えようとするのが真の愛です。ここに特記すべきことは、真なる愛は「完全投入して忘れる」ということです。与えて与えてからは、与えたことは忘れてしまうということです。これが愛に關する文先生のもう一つの教えの特徴です。いくら愛しても、自分が愛したということを考える必要はないということです。忘れてしまいなさいということです。忘れて、初めて心が空になり、謙虚になるのです。もし私がこんなに多く愛したのに、何の反応もない、悔しいという心を持てば、傲慢になってしまいます。一度、心が傲慢になれば、次からは真なる愛が与えられなくなります。ですから、愛を施してからは、すぐ忘れなければなりません。そうして初め

次に師の愛も同じです。師の真の愛、下向性の愛を受ける弟子たちは、自動的に心から師を尊敬したくなります。「本當に私たちの先生は偉大で立派な方である」という考えが生じて、先生の前には自然と頭が下がるのです。それで弟子たちは先生を尊敬せざるをえない

て、また愛したくなるのです。このようにして、いつも新しい気分でもって愛するというのが文先生の愛の思想です。父母も、師も、主人も、皆そのようにしなさいということです。これが真なる愛です。

(7) 愛の拡散

次は愛の拡散について話します。父母がそのような愛を子女に施すならば、子供は黙っているのでしょうか。愛は誘発効果を起こします。したがって、子供は父母の愛に感銘して、感謝の心を持って、父母に孝行するはずで、父母が至誠を込めて愛するので、子供は親に至誠を込めて孝行したくなるのです。これが孝行の愛であり、上向性の愛です。また父母の真の愛を受ければ、父母に対する孝行の心を持ちながら、夫婦が愛し合います。これが夫婦愛です。すなわち父母の愛から夫婦愛が誘発されます。これは横的な愛、水平の愛です。のみならず子女相互間、すなわち兄弟姉妹の間にも、愛が交換されます。これもまた横的な愛です。このように下向性の愛である父母の愛から、上向性の愛および水平の愛が誘発されて、家庭が愛で充滿するようになります。したがって家庭において、父母の愛、すなわち下向性の愛が最も重要です。

ました。新聞はみな学生を非難しました。それは間違いではありませんが、問題の核心が分かっていない論評であったのです。問題に対処する方法が間違っていたのです。学生の過ちは第二の問題です。一次的な責任は先生にあります。先生たちが誤ったので学生がそのようになったのです。先生たちが平素から三主体性を実践していたならば、そんなことはなかったはずで、殴られた先生個人の問題ではありません。一般的に、先生たちが平素から三主体性を実践していれば、学生たちは先生を殴るはずはありません。今回の学生の暴行は、なぜ自分たちを正しく教えなかったのかという不満の表現形態であるとみることができるので

また学生の父母にも責任があります。学生の父母が父母として下向性の愛を平常施していなかったからです。それに違いありません。父母のように先生を尊敬したいという考えにならないのです。目上の人を尊敬することが分からないのです。したがって、学生の暴行のような問題に対処することは、この三大主体思想でもって初めて可能なのです。そうして初めて解決の答えが出てくるのです。

前に言いましたように、三大主体の愛は、父母が子供に、師が弟子に、主人が部下に与える愛すなわち下向性の愛で

す。原則的に、この下向性の愛が先です。そしてこの下向性の愛に誘発されて、二次的に表れるのが上向性の愛と水平の愛です。愛は誘発効果を起しますから、上向性の愛が先になされて、それに対する反応として下向性の愛が表れることももちろん可能です。すなわち、子供が先に父母に孝行し、弟子が先に師を尊敬し、部下が先に主人を尊敬することです。そのようにしても父母の愛、師の愛、主人の愛が二次的に誘発されるのも事実です。しかし、原則的には、下向性の愛が先であって、上向性の愛や横的な愛はその次です。下向性の愛が先である場合には、上向性の愛と水平の愛は一〇〇パーセント誘発されます。ところが、上向性の愛が先の場合には、下向性の愛が一〇〇パーセント誘発されるといふ保証はありません。水平の愛も同じです。このように真なる愛の出発は下向性の愛です。真なる愛の根源が神であるからです。神からはすべてが下向きに与えられるのです。

それで例えば、企業体の長が従業員に真の愛を施せば、従業員は受けてばかりいるのではなく、必ず反応するようになります。すなわち社長がたくさんもうけて、たくさん温情を施すように努力すれば、部下は社長を尊敬し感謝します。そのような社長がもし会社の経営において困難に直

神は人類の父母です。私たちがお祈りする時に、「天にましますわれらの父よ」とよく言います。また、ある人は天のお母様とも言っているらしいのです。神が陽陰の原理をもっておられるからです。とにかく神は人間を子女として創られたのです。墮落のために罪人となりましたが、本来人間は決して罪人ではありません。神の子女です。それで神は人間の父母であり、真なる愛の本体です。

また神は、ヨハネ伝の一章一節以下の記録のように、口ゴスでもって宇宙を創造されました。口ゴスは真理であり、み言です。したがって神は真理の主体です。真理の主体とは何でしょうか。それはすなわち神自身が師（先生）であるということと、愛の主体であられるところの神は、同時に真理の先生なのです。また神は主人でもあります。創造主であるからです。創造主は同時に主管者です。したがって神は主管の主人です。したがって神が最も根源的な父母、師、主人なのです。

父母、師、主人を、わが国古来の用語で表現するならば、「君師父」です。君は国の主人であり、師は先生であり、父は父母です。この民族は、古来からこのような「君師父」の思想をもっており、この思想の根が神でありました。神自体が父母であり、師であり、主人です。愛国歌に「神様

面したとするならば、従業員たちは「自分たちの給料はふやさなくてもよいです。その費用で工場をもっと発展させてください」と言うに違いありません。このように企業主が真に愛を施しさえすれば、従業員は企業主を愛するので、それと同時に、従業員相互間にも横的な愛がゆきわたります。のみならず、従業員は工場の施設や建物までも愛するようになります。このように主体の下向きの愛、すなわち父母の愛、師の愛、主人の愛はいつも先次的です。このようにして、真なる愛が家庭に拡散し、学校に拡散し、企業に拡散すれば、結局はこのような愛が全国に拡散し、ひいては全世界にまで拡散していくのです。結局はこの地球星は神の愛で充滿していくのです。その時、初めて地球上のすべての犯罪は跡形もなく完全に消えていきます。その時、初めて本当の平和、永遠なる平和が実現されます。このような運動を今、文先生は世界的に展開されているのです。

(8) 三大主体の根源は神である

ここで問題となるのは、三大主体の根源はどこにあるかということと、それはすなわち神です。次にそのことを説明します。

が保護する我国万歳」という句があります。神は何でもって我が国を保護されたのでしょうか。父母の真なる愛、師の真なる愛、主人の真なる愛で保護してくださいました。このように父母、師、主人（君師父）の根が神です。それでこの三大主体の愛は天道です。したがって、三大主体思想は絶対的です。したがってこの思想は絶対的に滅びることはありません。かえってこの天道に背いた者、この思想を学ばなかった者が被害を受けるようになります。

今日、社会がこのように混乱状態になったのは何のためでしょうか。三大主体の愛、すなわち天道を守らなかつたからです。私たちは自然法則に逆らうと肉体的に被害を受けます。それで自然法則を守りながら生きています。同じく心も天道に従って生きなければなりません。神に根を下している天道だからです。天道を守れば平和になるし、守らなければ混乱が生じるのです。従来の宗教が愛を強調した理由はここにあるのです。

仏教は慈悲を行うようにと教えました。儒教は仁を行うようにと教えました。キリスト教は愛を行うようにと教えました。なぜかという、そうすることが天道を守ることになるからです。慈悲や、仁や、愛の根が神の真なる愛だからです。神の真なる愛が同時に、三大主体の愛であるか

らです。父母と子女の関係を規定する儒教の三綱五倫も三大主体思想に含まれます。仏教の徳目も同じです。キリスト教の愛の徳目もそうです。愛に関する聖人たちの教えは、みな例外なく、三大主体の愛の範疇に含まれます。

今日、従来の価値観が衰退したのは、慈悲や仁や愛の根が神の真なる愛であることを知らなかったからです。これらが、三大主体の愛の表現形態であることを知らなかったからです。したがって、従来のすべての宗教の徳目の根が、神の真なる愛、すなわち三大主体の愛であることが明らかになれば、従来のすべての徳目が活性化してきます。従来の徳目が現代人の心を指導しうる能力を再び回復できるようになるのです。

(9) 新しい価値観の定立と論説

終わりに、このような三大主体思想を基礎として新しい価値観が立てられるという話を話します。三大主体の真なる愛の行為と、その愛によって誘発される多くの対象の愛の行為、すなわち下向性の愛の行為と、上向性の愛、および横的の愛の行為を倫理的観点から見れば、それは本当の善です。知的、教育的観点から見れば、その行為がそのま

ま本当の真です。芸術的観点から見れば、それが本当の美です。このように見るとき、真、善、美は分かれてあるのではなくありません。真なる愛の行為が、評価する角度によって、真となり、善となり、美となるのです。これが文先生の立場です。従来のすべての価値観の根が、正に文先生の教えの中に含まれています。

したがって、文先生の三大主体思想による価値観が正に新しい価値観です。従来のすべての徳目に、この新しい価値観すなわち三大主体思想を代入すれば、それらの根が蘇生してきます。このような価値観を皆様が理解して必要な時に適切に扱うならば、それは三大主体思想を基礎とした新しい価値観の論説となるはずで

終わりにまた一言付け加えたいことは、新しい価値観の定立は三大主体思想を根拠としたものですが、新しい価値観の定立を本格的に扱うためには、神学的、哲学的、歴史的な根拠を必要とするということです。しかし、皆様が論説を書くに際しては、ここに述べたことで十分であると思います。

(一九九一・四・二 韓国「世界日報」論説委員会にて)

〈完〉

現代神学 最終回

金永雲 著
教育局監修

批判—「ユートピア神学」より続く—

(4) 統一主義者はあまりにも霊的なので、主流派のクリスチャンというよりはむしろ韓国のシャーマニズムのようであると言われていた。しかしだが、「ところで自由主義のクリスチャンたちはどこへ行こうとしているのだろうか」と尋ねるかもしれない。自由主義者たちは宗教を単なる倫理や社会運動、すなわちバルトが「文化的プロテスタンティズム」と呼んでいるある種の人間中心の道徳行動主義に変えてしまう傾向を持っている。自由主義的なキリスト教はせいぜい地域奉仕に退歩するか、悪くすれば議論好きの左翼的社会活動に流れてしまう。それゆえに、宗教の真髄を失ってしまうのである。

宗教的であるということは、神と一つになることに飢え渴いていることである。親なる神を抜きにした兄弟関係だけでは不十分である。自由主義の教会にいた若者たちが霊性と熱意を求めて根本主義者が主催する大会に赴くのは、別に不思議なことではない。彼らは、福音主義者が説く熱情的な霊性に思いがけているのである。